

第 1 章 大船鉾の歴史

1. 概略—はじまりから幕末まで—

京都市

大船鉦は、7月24日（旧暦6月14日）の後祭の山鉦巡行の最後尾を飾った船形の鉦である。現在巡行している船鉦は、7月17日（旧暦6月7日）の前祭の山鉦巡行のしんがりを務めた鉦で、近世まではそれぞれ巡行の日に因み、「七日船鉦」（現船鉦）と「十四日船鉦」（現大船鉦）と呼びならわされていた。ここでは、混乱を防ぐため、現在の呼び名である大船鉦で統一する。

二つの船形の鉦は、共に神功皇后の外征説話に取材しており、御神体人形も同じく、舳先から龍神安曇磯良^{あずみのいそら}、住吉明神、神功皇后、鹿島明神の4柱を安置する。船鉦が「出陣の船鉦」、大船鉦が「帰陣の船鉦」とされており、大船鉦の御神体人形は帰陣ということで、武装を解き、安曇磯良が合掌している点が船鉦と大きく異なる点である。

大船鉦の歴史は古く、文献上の初出は応永29年（1422）まで遡る。『康富記』応永29年6月14日の条には、「祇園祭礼也、神幸如例、梓山船以下風流盡美如例年」とあり、少なくともこの年以前より大船鉦が巡行参加していたことが確認される。その後、応仁元年（1467）に勃発した応仁・文明の乱によって、祇園会は停止に追い込まれ、33年後の明応9年（1500）に再興される。明応9年祇園会再興の史料である『祇園会山鉦事』には、「ほくの次第」として、応仁の乱前の山鉦を列挙したとされる箇所「一、同（筆者注：綾小路町四条間）南町 これハ十四日ニわたる 大船（註1）」とある。また「祇園会山ほくの次第（中略）応仁乱前分 十四日」にも「一、しんくくわうく舟 四条と綾少路間」と現四条町と同じところから出されていたことがわかる。

近衛政家の日記である『後法興院記』によれば、乱後の明応9年（1500）に再興されたのは、前祭の山鉦が26基、後祭の山が10基である。近衛政家はこの時57歳で、文明・応仁の乱以前の祇園会を覚えていたのであろう、「一乱以前のごときにあらず、再略儀なり、」と記している。同記録の後祭のことを記した6月14日条には、「山十外、無鉦」とある。また『祇園社記』にも大船鉦が出たとの記録はなく、明応9年段階では未だ復興できていなかったようである。この年に出されたのは、現在の名称でいえば、橋弁慶山、八幡山、鈴鹿山、観音山、浄妙山、黒主山、鯉山、役行者山、鷹山、そして現存しない「かつら山」の10基である。規模が大きい分、鉦の復興は遅れ気味であったのだろう。しかしながら、大永5年（1525）の制作と推定される「洛中洛外図」（歴博甲本）などには数多くの鉦が描かれており、明応9年からそう遠くない時期には次々と再興を果たしていったものと思われる。

さて、応仁の乱前の大船鉦の様子を描いた絵画はないが、当該期の船鉦を描いたと指摘されている「月次祭礼図模本」（東京国立博物館蔵）を参照してみると、この時期には囃子方が屋台上に確認できない。また永禄8年（1565）制作の狩野永徳筆「（上杉

本) 洛中洛外図屏風」(米沢市立上杉博物館蔵) や 16 世紀前半から半ば頃に制作されたとされる「日吉山王・祇園祭礼図屏風」(サントリー美術館蔵) の船鉦でも、舞台上は御神体人形のみで、囃子方の姿は描かれていない。これが江戸時代に入ると変化する。寛永期に制作されたとされる「祇園祭礼図屏風」(京都国立博物館蔵) では、後祭の大船鉦の屋台上に囃子方の姿が確認されるようになる。文献でも寛永 3 年(1626)以前に刊行されたと考えられている丹緑本『祇園祭礼図』に「ふねほこ このふね定まりてあとにわたる、これにも人ぎやうの左右に人ありて、はやしわたす」とあり、江戸時代初めには囃子方が備わっていたことが知られる。

現在、祇園祭の囃子は、大船鉦を除けば、7 基の鉦と、3 基の曳山、そして 2 基の傘鉦で演奏される。「コンチキチン」という音に代表されるように、現在ではあたかも鉦が中心であるかのように表現されることの多い祇園囃子であるが、鉦が鉦上に姿を現すのは、太鼓や笛に遅れ、16 世紀後半のことであると指摘されている。それ以前は、笛・太鼓・鼓のセットであり、鉦の登場により、鼓が姿を消すことになる。

こうした囃子の演奏者、すなわち囃子方がどのような組織化を辿ってきたのかについては不明な部分が多い。現在、鉦は囃子方内部の下の階梯、すなわち若年層が受け持つのが通例であるが、そうした年齢階梯的な組織化がいつ頃はいじまるのか、その時期は不明である。しかし、それが結果として囃子方の人数増加を招来したと推測できるのではない。

大船鉦と船鉦は、近世中期以降、屋根部分が前後左右に増築されていることが、絵画資料等から判断できる。現在の船鉦の屋根をみても、中心の屋形から大きく前に前拝部分がとりつくなど、増築を示す作りとなっている。こうした屋根部分の増築の背景には、鉦と違い、後発で囃子が導入された事情が反映していると考えられる。なお、船鉦と大船鉦は、鉦という名称がついてはいるが、分類上「屋台」の範疇に入るものである。

江戸中期の宝暦年間の山鉦の姿を示す『祇園御霊会細記』掲載図には、船鉦は切妻の屋根に、一方の大船鉦は、切妻の主屋根に前拝が取りついており、すでに屋根部分の増築がはじまっていたことを示している。

さて、天明 8 年(1788) の天明の大火では、京都の都心部のほとんどが罹災し、大半の山鉦が焼失する。大船鉦も同様で、御神面を除く本体や装飾品のほぼ全てを失ってしまった。10 年後の寛政 10 年(1798)には、何体かは定かではないが御神体人形が再興されたことが知られ(『祇園会山鉦評』)、おそらくは遅くともこの時以来、会所飾りのみ復興されたと思われる。大船鉦が巡行参加するのは、罹災後 15 年余りを経た文化元年(1804)であることが、六角町文書の中に存する『祇園山鉦書 人』に記されている。復興した鉦には、文化 4 年(1807)には後掛幕が、同 10 年(1813)には大金幣が新調されるなど、行装が徐々に整えられた。

これ以後、元治元年（1864）の元治の大火に再び罹災するまでが、大船鉾が最も華麗な姿を見せた時期であり、現存する装飾品等の遺品類は、この時に整えられたものがほとんどである。元治の罹災により、本体部分が焼失、その後何度か再興への動きを見せるものの実現することなく近年に至り、現在巡行復帰に向けて力強く前進している。

大船鉾年表

応永 29 年（1422）	この頃までに、大船鉾巡行に参加
応仁元年（1467）	応仁の乱により祇園会中止
明応 9 年（1500）	祇園会、33 年ぶりに復興
天明 8 年（1788）	天明の大火。大船鉾焼失
文化元年（1804）	大船鉾復興
元治元年（1864）	蛤御門の変による大火で大船鉾焼失
平成 9 年（1997）	囃子復活
平成 19 年（2007）	「大船鉾装飾品」（121 点）が京都市指定有形民俗文化財となる 居祭復活

参考文献：

- 植木行宣『山・鉾・屋台の祭り 風流の開花』白水社、2001 年
河内将芳『中世京都の都市と宗教』思文閣出版、2006 年
植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼—山・鉾・屋台と囃子—』（京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター研究叢書 1）岩田書院、2005 年

註 1 この一行前では、前祭の船鉾も「大船」と表記されている。

2. 絵画資料からみた大船鉾の形状の変遷

小寄 善通

幕末期に焼失した大船鉾を、今回焼失前の姿に復原するにあたり参考とした資料としては、焼失を免れた懸装品などの遺品類、現在祇園祭に参加している船鉾、大船鉾についての記載のある江戸期の文献資料、そして大船鉾を描いた絵画資料などがあげられる。

ここでは、応仁・文明の乱以前には存在が確認できる大船鉾について、絵画資料から得られるさまざまな情報について考えてみたい。まず祇園祭礼を描いた絵画作例であるが、古くは原本が12世紀に遡る「年中行事絵巻」の諸模本のなかに見出される。神輿3基の巡行を主体としたもので、ここでは未だ現在につながる山鉾の姿は見られない。この後は残念ながらしばらくの間、祇園祭を描いた作例は確認されず、室町時代に至って原本が15世紀の作例と推定される「月次祭礼図模本」(東京国立博物館蔵)がようやく確認される。ここでは既に現在のような山鉾が登場し、船の形をした鉾も描かれている。ただし、これについては前祭の鉾とともに描かれていることから、前祭の船鉾に相当すると考えるのが妥当であろう。

16世紀に入ると、洛中洛外図屏風のなかに祇園祭の前祭の光景が捉えられるようになり、さらには祇園祭礼に焦点を当てた祇園祭礼図屏風も描かれるようになる。16世紀半ばの制作と推定されるサントリー美術館所蔵「祇園祭礼図屏風」には、現存する絵画資料として最古の後祭の様子が描きとめられており、いくつかの山も散見されるが、残念ながら大船鉾の姿はここには認められない。一般に洛中洛外図では前祭巡行の光景が下京地域に描かれ、後祭を描くことはない。また、初期の祇園祭礼図においても、前祭巡行と神輿渡御を左右隻に描き分けることが通例であり、後祭を描く絵画資料は桃山時代までは上記のサントリー美術館本のみが現在知られている。

江戸時代に入るとようやく祇園祭礼図のなかに、前祭と後祭とを左右隻に描き分けるものが登場し、大船鉾についてもその姿を確認することができる。大船鉾を描く絵画作品として現在のところ最も古いと考えられるのが京都国立博物館所蔵の「祇園祭礼図屏風」である。近年の研究(註1)では寛永年間前半とする指摘もあり、右隻に前祭、左隻に後祭と神輿渡御等を配する。大船鉾は巡行列の最後尾、左隻右下端に描かれる。帆柱をもち、井桁に補強された車輪の姿は古様である。本図右隻には大船鉾とほぼ同様な姿の船鉾も描かれており、屋形の屋根の形状はどちらも唐破風である。水引等の懸装品は図様や色彩が微妙に異なるが、どちらも縦に4~5段継のものが用いられている。最下段の裾幕と思われる、船鉾にいかにもふさわしい波文様のものは、両方で波と地に用いる紺と白を入れ替えている。描写の正確さにおいて疑問が残るのは、帆柱が大船鉾では上杉家本「洛中洛外図屏風」中の船鉾と同じく屋形の前に位置

するのに対し、船鉾では屋形の後ろに描かれている点である。

これに続く資料としては祇園祭八幡山に伝えられる「祇園祭礼図屏風」が著名である。おおよそ明暦年間ころの制作とされるもので、作者は海北友雪である。祇園祭礼図屏風の内、後祭を描く片隻のみが伝来したもので、四条通を進む巡行列最後尾に大船鉾が登場する。やはり屋形の前に帆柱をもち、車輪の描写や懸装品の大略（図様は異なるが）も前出の京都国立博物館本「祇園祭礼図屏風」の描写と同様である。ただし、ここでは屋形屋根は千鳥破風となっている。

宝暦7年（1757）刊行の『祇園御霊会細記』には既に帆柱のない両船鉾が描かれており、「この舟にむかしは帆柱あり、朝鮮竹の甚見事成物なりしが、長きもの故、引まはし勝手あしく今はこれを用ひず」とある。屋形屋根は船鉾は切妻屋根、大船鉾は切妻屋根から前方に唐破風が延びる形状である。

江戸時代後期、大船鉾を描く絵画資料は増加する。その中でも、大船鉾を幕末の焼失直前の姿に復原するには、天明の大火により焼失した大船鉾が再興される文化元年（1804）以降の絵画資料が検討材料となる。現在確認される作例を以下に列記する（本一覧は京都市文化財保護課安井雅恵技師作成のものを一部修正したものである）。

- 1 「祇園祭礼真図」2巻 横山華山 天保5～8年（1834～37）
- 2 『祇園会御祭礼 山鉾之由来』1冊 有楽斎長秀 天保7年（1836）
- 3 「祇園祭礼図屏風」6曲1双 天保10～安政4年（1839～57）
- 4 「祇園祭礼絵巻」1巻 伝冷泉為恭 嘉永元年（1848） 國學院大學神道資料館
- 5 「京都祇園祭礼鉾之図」3枚続 五雲亭貞秀 弘化4～嘉永5年（1847～1852）
京都府立総合資料館
- 6 「大船鉾図」1幅 豊彦印 19世紀 四条町大船鉾保存会
- 7 「大船鉾図」1幅 岸連山 安政6年（1859）以前
- 8 『増補華洛細見図会 東山之部初編』1冊 文久4年（1864）
京都府立総合資料館
- 9 「八坂神社・大船鉾図」2幅 幸野樗嶺 明治元～明治5年（1868～1872）
- 10 「大船鉾図」1幅 幸野樗嶺 明治5年（1872）以降
- 11 「大船鉾図」1枚 村瀬玉田 明治時代（19世紀） 奈良家記念杉本家保存会

これらの中には細部まで正確に描かれているとは言い難いものも含まれる。屋形の屋根の形状にばらつきが認められるからである。復原に際しては他の資料との照合や、残された絵画資料の中から、最大公約数的な要素を抽出する作業が欠かせない。

ここでは屋形屋根の形状について検討してみよう。一覧の内、遠景に大船鉾を小さく描く作品5は切妻屋根。作品4、6、7は切妻屋根から前方に唐破風を伸ばした姿。これは『祇園御霊会細記』の図と同様であり、制作にあたり何らかの祖本を参考にし

た可能性をもつ。作品 1、2、8、11 は前左右に唐破風をもつ形態（大船鉦の屋形屋根が左右対称であるとの判断に基づく。以下同様。）。ただし、作品 2、8、11 については前方から大船鉦を捉えているため、屋根後方の形状については判断不可能であり、後方にも唐破風をもつ可能性を否定できない。作品 3、9、10 は前後左右に唐破風を持つ形態である。大略としては、唐破風を多用する点に大船鉦の特色がうかがえる。

ここでまず考慮されねばならないのは、作品 9、10 の作者である幸野楳嶺が大船鉦を所有する四条町の生まれということである。楳嶺は弘化元年（1844）の生まれであり、大船鉦が焼失した元治元年（1864）には既に成人している。作品 9、10 とともに大船鉦焼失後の明治に入ってから制作であるとはいうものの、楳嶺の大船鉦に対する記憶は他の画家のものとは比較にならないであろう。

次に特筆されるのが作品 3 である。江戸時代末期に制作されたこの屏風は、前祭の山鉦 23 基と後祭の山鉦 9 基を左右隻に描き分けたもので、当時巡行していた山鉦のすべてが描き込まれている点でまず注目される。前祭、後祭とも、くじとらずの山鉦の巡行順は正確で、本図を制作した画家が祇園祭についてかなりの知識、情報を得ていたことが認められる。ただし、残念ながら『改訂近世祇園祭山鉦巡行史』（1974 年 祇園祭山鉦連合会刊行）に掲載されている当時の実際の山鉦巡行のくじ順表と照らし合わせても同一の年は見当たらない。しかし、本図の景観年代については、画面に描かれる山鉦の形態や巡行参加状況からおおよその景観年代を割り出すことができる。まず景観年代の上限であるが、後祭に鷹山が参加していないことから文政 10 年（1827）以降という時期が想定できる。また、綾傘鉦が本図に描かれるような小型の曳鉦に改造されるのが天保 5 年（1834）、さらには天明の大火以来、函谷鉦が 51 年ぶりに復興するのが天保 10 年（1839）である。よって景観年代の上限は天保 10 年ということ矛盾がない。景観年代の下限は、多くの山鉦が禁門の変（7 月 19 日）により罹災するのが元治元年（1864）、本図に描かれている蟠螂山が不参加となるのが、先にも触れた『改訂近世祇園祭山鉦巡行史』掲載のくじ順表によると安政 5 年（1858）であることより、安政 4 年（1857）ということになる。景観年代としては天保 10 年（1839）から安政 4 年（1857）までの 19 年間と確定できる。制作年代についてもおよそ 19 世紀半ばと考えると差し支えない。

本図について最も注目されるのは、各山鉦を飾る懸装品などの図柄の正確さである。各山鉦に現在伝わる胴掛や見送りの中に同一のものが数多く見受けられるのである。この点は、現存する大船鉦の懸装品についても当てはまる。これは近世の他の祇園祭礼図にはまったく認められない本図独特の特徴といえる。画家は本屏風制作のために、数年にわたり山鉦巡行だけでなく宵山にも足繁く通い、精力的にスケッチを重ねたことであろう。この正確さは懸装品のみにとどまらず、山鉦の他の部分についても同様であることをうかがわせるのに充分である。

では、大船鉾復原の大きなポイントの一つである屋形屋根の形状について検討してみよう。まず、前祭の船鉾の屋根がほぼ正確に描かれている点に注目したい（図 1）。右後方斜め上から捉えた船鉾の屋根は、前方の千鳥破風が描写角度の都合で見えないものの、前後の唐破風、左右の千鳥破風は現存する船鉾と同じである。本図において、船鉾と大船鉾の屋根の描写が意識的に描き分けられていると判断できる点、また、船鉾の屋根が正確に描かれていると判断できる点を考慮すれば、榎嶺画と同じく前後左右に唐破風を持つ大船鉾の屋根の描写（図 2）についても、かなりの信憑性をもつものと結論づけられる。

以上、絵画資料に認められる大船鉾の形態についてその概略を述べてきた。復原に際し、最も注意を払う必要のある屋形屋根の形状については、幕末期の制作になる「祇園祭礼図屏風」および幸野榎嶺による 2 作例が最も参考となる作例として評価できる。本稿においては触れる余裕のなかった艦屋形についても、以上 3 作品に矛盾がないことを最後に付記しておきたい。



図 1 「祇園祭礼図屏風」（個人蔵）より
船鉾



図 2 「祇園祭礼図屏風」（個人蔵）より
大船鉾

註 1 八反裕太郎「京都国立博物館蔵祇園祭礼図屏風の史的位置」『美術史』第 154 冊、2003 年